

平田篤胤の蘭学観

中川和明

はじめに

平田篤胤は、文化文政・天保期の江戸にあって多数の著書をあらわすとともに、国学塾気吹舎を主宰して門人の教育に努めた。さらに、①禁裏に著書を献上②神道の本所である白川家・吉田家に接近③水戸藩への仕官の運動などの行動にみられるように、篤胤は幕藩制国家における公武両方の権威を利用して国学を普及させようとしたのであった。こうした国学の研究・普及の活動の過程で、篤胤は儒学・仏教・蘭学など外来の思想・宗教と激しく競合することになるのである。ところで、蘭学は文化文政期に至って転換期をむかえ、世代交替・専門化・公学化の傾向を示すようになったといわれている¹⁾。篤胤が国学の研究・普及に努力したのが、こうした蘭学の隆盛の時期と重なっていたことに注目する必要があるように思われる。平田国学の歴史的意義を考える際に、蘭学との接触は見逃すことができないように思われるのである。さて、篤胤と蘭学との関係についてはすでに先学によって注目されてきたところである。日本思想史学者の田原嗣郎²⁾氏は、篤胤がヨーロッパの学問（蘭学）を超経験的不可知界を認めた上での合理主義として思

想的に親近感を以て理解したと指摘している。また、地理学者の鮎沢信太郎氏³⁾は、篤胤による西洋の地理学・天文学の摂取について詳細に論じた。日本思想史学者青木歳幸氏⁴⁾は、蘭学の拡大の例として、篤胤による西洋天文学摂取について簡単に触れている。日本医学史学者の服部敏良氏⁵⁾は篤胤による西洋医学の摂取の実態を論じた。歴史学者の平野満氏⁶⁾は、篤胤の蘭学塾入門の事実を明らかにした。日本文学研究者ドナルド・キーン氏⁷⁾は篤胤の洋学摂取の概略を記している。これら先学の研究によって、篤胤と蘭学各分野との関係が次第に明らかになってきたのである。

しかし、こうした従来の研究では、篤胤の蘭学観の全体像の追求がなされていないのである。殊に、篤胤の蘭学批判の検討が不十分である。そこで、本稿では、篤胤が①蘭学の隆盛に対して如何に述べているのか②蘭学を如何に摂取しているのか③蘭学を如何に批判しているのか、以上三点について具体的に検討していくことにする。それによって、篤胤の蘭学観の歴史的特質について考えてみたいと思うのである。

一、篤胤と蘭学隆盛

篤胤は寛政七年（一七九五）正月に秋田藩を脱藩したが、これ以後、天保一二年（一八四一）はじめまでの約半世紀にわたって江戸で暮らしたのであった。そして、蘭馨堂^{（19）}で文化四年（一八〇七）から同六年（一八〇九）のおよそ二年間蘭学を学んでいる。この蘭馨堂は新進の蘭方医である吉田長淑の私塾であり、篤胤はここで主に西洋医学を学んでいたものと考えられる。まず、蘭学の隆盛に対して如何に述べているのかみていきたい。

（1）『蘭学用意』の蘭学観

篤胤の著述目録『大壑平先生著撰書目』の中に、『蘭学用意』^{（11）}が記されている。『蘭学用意』の原物は今日見つかつてはいないのであるが、この目録には『蘭学用意』の内容の概略が説明されている。そのため、この著書の内容を推測することができるのである。例えば、この『蘭学用意』について、

①「こは蘭学と云ふ事の。皇国に始りたるより。此学の弘まれる事。

中にも医術また技巧の物等に於ては。国用を為すも多かれど。是に就て又弊を生ぜし事も少からず。」

②「抑外蕃の。御国に寄りて仕へ奉らふ事は。総ては天照大御神の御心なれば。次々に万国挙りて。其事物を貢奉るべき事なるが。分て云ふ事は。其荒御魂。大禍津日神の知看す事ゆゑに。彼吉事に凶事いつぎ。世の害となること有るも。広大なる御神徳の中に籠り来れるにて。止べからざる勢なり。」

③「されば西洋に限らず。総て外蕃の事は。其寄せ給ふまに。」

其好きを撰びて之を用ひ。悪きを捨れば。皇神の御心に叶ひ。之に反する時は。皇神の御心に違ふ。此を取捨せざるは偏執なり。」

と記されている。この①では蘭学の伝来には功罪の両面があるとする。②では蘭学など外来のものの伝来は天照大御神の御心であるとする。③は蘭学のようなものは取捨選択して撰取する必要があると述べているのである。

（2）『入学問答』の蘭学観

篤胤は国学の入門書である『入学問答』を著している。この中で蘭学など「外国の事をも学び候者の。心得」について、

皇国の学問ほど。広大なるは無しと申す故は。右申候如く。儒学仏学を始め。種々の学問これあり候て。其道々の意と事とが悉く。皇国の学びごとくに混入いたし候て。譬へば大海へ。諸々の川々より落来る水の。交り居候如くにて。人の心も多くそれに移り。彼れを非とも。此を是とも別ちかねて。惑居候なり。（中略）殊にもろく学問の道は。たとひ外国の学に候とも。其好事は選びて。御国の用に致さむ為に。学び候事ゆゑ。実は漢土。天竺。淤蘭陀の学問をも。凡て御国学びと申候ても。違はぬ程の事にて。是が御国人にして。外国の事をも学び候者の。心得にて候。」^{（11）}

と述べている。国学には中国・インド・オランダなどの様々な学問が流入しているため、外来の学問であっても「御国の用」のためにこれらも学ぶ必要があるというのである。

また、篤胤はこの『入学問答』で外来の学問に対する心得に関して次

のような説明も行っている。⁽¹²⁾

① 凡て世の古学者流。儒者仏者の。吾道をのみ狭く域りて。他を知らざる管見をば。笑ひ居候へども。吾もまた。吾が古学をのみ知りて。固陋なる事を顧みず。それ故わが聞知らぬ。外国説を聞ては。驚き惑ふ者も間々これ有り。身方より見るに。心苦しう候ゆゑ。拙子が弟子を教授いたし候には。その倭心を堅固に致し候上にては。手の及ぶ限り。他をも能く学び候やうにと。誨し候事に御座候。

② 其故は。凡て外国々の説。また他の道々の意をも。能く尋ね比考いたし候はでは。我が道の実に尊き事を。知らざるにて候へばなり。外の道々をも。よく知り候上にて。信じ候こそ。実に知りて信ずると申す物に候なり。

③ 拙子は右の心得に候ゆゑに。他の道々の意。及び其説々をも。及びむ限りは。明らめむと致し候事に候。されば。儒学仏学蘭学に依らず。何にても他の道々を、御精究なさるべく候。

この①では外来の学問・思想を知らない国学者を批判して「手の及ぶ限り。他をも能く学び候やうに」と述べている。②によれば、外国の学問を知らなければ国学の優れたところが分からないという。③では「儒学仏学蘭学」など外来の学問も学ぶようにすすめている。このように『入学問答』では、蘭学などの外来のものに対して柔軟な姿勢をとっているのである。

(3) 『志都能石屋講本』の蘭学観

篤胤は『志都能石屋講本』で国学的な医学論を展開したのであった。その中で蘭学について、

① 「世間の有様を考ふるに。今は物ごと新奇を好む風俗なれば。此の学風（蘭学の学風―筆者註）も。儒仏の道の栄えたる如く。段々と弘まり行くことで有らうと思はれる。然らんには。世の為人の為と成べきことも多からうなれども。又害となることも少なかるまいと思はれるでござる。是こそは。彼吉事に此凶事のいつぐべき世の中の道なるを以て。然やうには推量知られることでござる。」

② 「抑かく外国々より。万の事物の。我が大御国に参来することは。上に申す皇神等の大御心にて。其の御神徳の広大なる故に。善き悪きの撰無く。森羅万象ことごとく。皇国に御引寄せ遊ばざる、趣きを。能く考へ弁へて。外国より来る事物は。よく撰採りて用ふべきことで。申すは畏きことなれども。是すなわち大神等の御心掟と思ひ奉られるでござる。」

③ 「然れば渡来の物共は。必ず善きを撰んで用ふことは申すまでも無く。悪きをも猥りに捨ること無く。其の相応な処へ遣ふやうにすれば。世に有りと有る程の物。一つとして不用と云は有るまいでござる。」

と述べている。①では蘭学には功罪両面があるとしている。②・③では蘭学のような外国のものは取捨選択が必要であるとするのである。

以上のように、篤胤は蘭学隆盛の状況を強く意識していたのであった。『蘭学用意』『入学問答』『志都能石屋講本』で蘭学など外来の学問・思想も大いに学ぶようにすすめている。しかし、蘭学は取捨選択しながら摂取しなければならぬと繰り返し主張していたのである。

二、篤胤の蘭学撰取

先にみたように、篤胤は蘭学など外国の学問のよいところを積極的に取り入れるように主張していたが、それでは具体的には篤胤が国学の中に蘭学をどのように撰取しているのかみていきたいと思う。

(1) 西洋の窮理

篤胤は、蘭学の学問方法の特徴について「其理を窮める。夫故かやうの学び方を。窮理の学とは云で御座る。」(『講本気吹麩』)と説明している。さらに、この西洋の窮理について次のように述べている。

- ① 「近ごろ淤蘭陀と云ふ国の学問始りて、此大江戸などには、是を学ぶ人多かるが、誠や彼国人は、深く物の理を究むることを好みて、何くれと、考へ出たる事も多かるが中に、」(『鬼神新論』)。
- ② 「彼の国人(西洋人―著者註)は。甚だ深く物を考へる国で。何に寄らず。あらゆること。根から底から穿鑿しつめる。夫故天文地理のことを始め。万の細工もの。医療のことなども。万国最上に委く。慥なことで御座る。」(『講本気吹麩』)
- ③ 「近ごろ。西の極なる阿蘭陀と云国よりして。一種の学風おこりて。今世に蘭学と称する者。即ちそれでござる。元来その国柄と見えて。物の理を考へ究むること甚だ賢く。仍ては発明の説の少なからず。」(『志都能石屋講本』)

この①～③のように、篤胤は西洋の窮理の優れていることを率直に認めているのであった。そればかりではなく、西洋の窮理家の態度について、

④ 「西洋人の事物の理を窮極めて、その知れざるところは、ゴットの所為なりと云ひて、厚くその天神を尊む学意」(『靈能貞柱』)

⑤ 「ドウシテ考へテモ知し又事ハ、コリヤ人間ノ上デハ知レヌ事ジヤ。造物主ト云テ、天ツ神ノ御所業デ無テハ、測レヌト云テ、トントオシ推量ナコトハ云ハヌデゴザル」(『古道大意』)

と述べている。この④・⑤のように、西洋人が人知をつくしても分からないことを造物主の所為としてそれ以上は推論しようとしないう態度を高く評価しているのである。

(2) 西洋の天文地理学

篤胤は、西川如見著『天経或問』『華夷通商考』や山村昌永著『増訳采覧異言』などを優れた西洋流の天文地理の書籍として紹介している。こうした西洋の天文地理学を重視する理由として「天文地理及ピ外国ノ説ヲ以テ、御国ノ万国ニ優レテアルト云ハ、此天地ノ間ノ公論ナルコトヲ、示サウト存ズルデゴザル。」(『古道大意』)と述べている。その上、西洋の天文地理学の性格について、

① 「天文地理ノコトニ付テハ、西洋人ノ考タル説ガ、第一ニ委ク、誰ガ聞テモ分リ易キコトユエニ、今ハ其説ニ因テ云コトジヤ。(中略)阿蘭陀ト云フ国ハ、其万国ヲ、自由自在ニ乗渡ラウトスルニ付テハ、天文地理ニ委シク無テハナラヌ事ユエニ、是ヲ第一ノ学ビトシタモノデゴザル。其上ケシカラス、氣ヲ長ク物ヲ考ヘル国風デ、底ノ底マデ物ヲ考ヘル、其考ヘノ為トテ、種々測量ノ道具ヲ拵ヘ、譬ヘバ日月星ノ有形ナドヲ見ントテハ、望遠鏡、遮日鏡を拵ヘ、又其大サ遠サ近サヲ知ントテハ、量地ナドノ道具ヲ考ヘ、夫ヲスルニモ、五

年十年、乃至一生モカ、リ」(『古道大意』)

②「近き代になりて、遙に西なる国々の人どもは、海路を心にまかせて普く廻りありくによりて、この大地のありかたを、よく見究て地は円にして、虚空に浮べることなど考へ得たるに、かの漢国の旧き説どもは、皆いたく違へることの多きを以て、すべて理を以て、おしあてに定むることの、信がたきを知るべし、」(『靈能真柱』)と述べている。①では西洋の天文学は詳しく分かりやすいと評価し、さらに観測のために望遠鏡など優れた発明がなされていることを紹介している。②では西洋人が実際にまわって地球を調査した努力を高く評価している。そして②では伝統的な中国の天文学の批判も展開しているのである。

また、篤胤はこうした西洋の天文学の成果を利用している。例えば、地球の形状について、

扱此大地ガ丸イ物デ、中ニ浮テキルニ相違ナキ証拠ニハ、船デ東ヘ東ヘト乗テ行クト西ヘ出ル。是ニ於テ、円体ト云説ガ動カヌデゴザル。然レバ其通り丸イ物ナレバ、イ、ツコヲ上トモ下トモ、言難キヤウナレトモ、此丸ク見エル大虚空ニ、北極南極ト申テ、トント動ヌ処ガ有ル。是ハ譬ヘバ、車ニ枢軸ノアル如ク、又磨ニ躋ノ有ヤウナモノデ、此外ハ星モ何モ周旋レトモ、是ハメグラズ、夫故ニ極ト名ケタモノデ、極ハキハマルト云フ字デ、此北極南極ト云ヲ、中真ニ取テ上下ヲ定メ、三百六十二割ヲスル。但シ少余リガ出ル。サテ其三百六十余ヲ、又コノ大地ヘモ割付テ、其一ツヲ一度ト云フ。一度ノ広サガ、御国ノ里数デ、大抵三十里ホドニ当ル。(『古道大

意』)

と説明している。地球の形態や大きさを具体的に紹介しているのである。こうした知識をもとにして、

③「コノ大地ノ内ト見エルガ、扱ハコノ大地球ノ内ニハ、ソシナ国(極楽浄土―筆者註)ハタエテナシ。此間ヨリ申通り、此大地ノ内デハ、御国ホド結構ナル国ハナイカラ、強テ戯レニイハズ、御国ナドガ極楽トモ云ベキ国デゴザル。西方十万億土、天竺ノ西ヘくト、其ツマリへ行ケバ、大地ハ丸キモノ故東ヘ出テ、即御国ヘ来ル。サスレバ御国ナドモ有マセウ。」(『出定笑語』)

④「寅吉笑て云く、地獄極楽といふは、愚なる者を威す為に、後人の作言したるなり、と師説(仙人の説―筆者註)なり。殊に極楽は、十万億土にあるといへば、地つゞきと聞ゆるに、師に伴はれて大空に昇り、遠き国々までも行て見たるに、何と見ても、大地は円き物にて、くるりと廻りても、十万億土はありそもなし。」(『仙境異聞』)

と述べている。③では、地球は球体であるから西へ西へと行けば日本にもどつて来るのみであり、この地上に西方極楽浄土は存在しないと主張している。④は篤胤と少年寅吉の問答で、寅吉が「十万億土」にあるとされる浄土を否定している部分である。この場合も地球が球体であることが根拠となっている。篤胤はこうした西洋の天文学の知識を利用して仏教の極楽浄土を批判しているのであった。

(3) 西洋医学

篤胤は一時医者をしていたこともあって、西洋医学にも大きな関心をもっていた。例えば「医薬製煉の道ことに委く。其書とも、次々に渡り来て。世に弘まり初めたるは。即ち神の御心であらうでござる。然るに其の渡り来る薬品どもの中には。効能の勝れたるも有り。」(『志都能石屋講本』)と述べているように西洋医学を高く評価していた。さらに、

外つ国より奉る種々の中に。医薬のあづかる類のことは。追々申す通りの訣ゆゑ。別して御国の用を為すでござる。それは尤も善いことを撰んで取るが宜いが。其のうちには。西洋人の解体の事をよく明らめておいたを見て。常に体の中は。かうした物と云ふことを心得るが肝要で。病の発るその原を知らねば。療治は成がたいでござる。其つねを知て居れば。其れに違つて居るが病と知れる事じやが。夫ゆゑ西洋人。は少し異つた病で死んだ人は。必解体して見るでござる。さて其解体の趣を知るには。医範提綱。解体新書など宜く。また凡べて治療の心得となる事は。内科撰要など至て委き物でござる。(『志都能石屋講本』)

と述べている。このように西洋の医学や薬品は「御国の用」となることが大であるとして、『解体新書』『医範提綱』『内科撰要』といった西洋医学の書籍を読むようにすすめているのであった。また、西洋の人体解剖について、

病を治しまするに。まづ人の体の常を。能く知て後に。夫に違て居ることは。病ぢやに依て。其の体の常を能く知らねば。病は治すことがならぬ。と云処から。人のからだを。腑解と云て。尽く切りこ

まざき。目は此の訣で見える。耳は此訣で聞える。と云やうに吟味して置て。(中略)又一通り。さやうに療治しても。どうしても直らぬ病をば。其の病人の死だ跡で。どう云う訣で。此の病は直らぬだ。と云ことを知らうが為に。是非腑わけをして見て。其理を極める。(『講本気吹颯』)

と説明している。西洋の人体解剖を驚きをもって紹介している。このように篤胤は蘭学のうち医学や薬を最も高く評価して撰取しているのである。なお、中国医学に対しては批判的である。(30)

(4) 西洋の四元説

篤胤は西洋の四元説(四元素説)をしばしば紹介しているのであった。例えば次の通りである。

①「西の極なる国々の人どもの、万の物の理りを考へ窮めむと、深く心をくだくけにや、然すがに悟得て、世の有る万の物、すべて風火水土の理りに洩たる事なしとて、此を四元と号て、いみじき物にいふなるは、実に然ることなり。」(『靈能真柱』)

②「小乗部ニ、四大トイフ説ヲ云テアルガ、コノ四大トイフハ、地水火風ノ四ツヲ申テ、コノ道理ヲ以テ天地間ノ道理、マタ人身ノワケヲモ説タモノデ、是ハ西洋ノ国々デハ、甚古クカラ申タコトデ、今以テ阿蘭陀ナド、スベテ西ノ極ナル国々デハ、是ヲ四元ト号テ、是デ物ノ道理ヲサバクテゴザル。是ハ実以テ尤ナコトデゴザル。」(『出定笑語』)

右の①では西洋人の四元説(風火水土)について「実に然ること」としている。②でも「実以テ尤ナコト」と述べている。このように西洋の

四元説を肯定しているのである。②では西洋の四元説と同様にインドの四大説（地水火風）を肯定していることがわかる。なお、篤胤は右のように西洋の四元説やインドの四大説を肯定しているが、中国の五行説（木火土金水）に対しては批判的である。中国の五行説を批判するた⁽³³⁾めに西洋の四元説やインドの四大説を利用していると考えられるのである。

以上のように、篤胤は西洋の窮理・天文地理学・医学・四元説などを高く評価して、実際にこれらを国学に摂取している。そして、これらを利用して仏教や中国の学問の批判も行っているのであった。

三、篤胤の蘭学批判

篤胤は前章でみたように蘭学を摂取しているが、その一方でこれを激しく批判しているのである。以下、西洋の窮理・天文地理学・医学・四元説などの蘭学の各分野に対して如何に批判しているのかみていきたい。

(1) 西洋窮理の批判

篤胤は『鬼神新論』の中で西洋の窮理を評価しつつも批判しているのであった。⁽³⁴⁾さらに、『靈能真柱』の中で西洋の窮理に対して、

①世の蘭学する徒、その学びの正意を非心得して、その窮理家など名告る輩、すべて理を以ておし考へて、知られざることなしと云ふなるは、西洋人の事物の理を窮極めて、その知れざるところは、ゴツトの所為なりと云ひて、厚くその天神を尊む学意に背へり、

②此は、かの蘭学する徒、もろこしのまなびなどをば怯きもの、極に

いへども、いまだ己々も漢意の去り終ぬによりてなるぞ、其はいかにと云ふに、鬼神新論にいへる如く、漢土も上つ代はしからねど、後の世の生意に、天帝の古伝、また、幽冥のことなどをば、信ざる悪風俗となり、その説どもの皇国に渡りて、世にひろがり、いま蘭学する徒も、その黄口の時には、まづ、漢籍より読覚ゆる故に、その先人の生さかしらの、障となりて斯在ぞかし、如此て、己を省ず、漢学びの狭きを嘗るはかのいはゆる、五十歩にして、百歩を笑ふたぐひなり、いかに、蘭学の正意に背へるにあらずや、

③疫神、幽魂、狐妖の類ひも、四元の理、また神経の謂を知り、蘭書によりて考ふるにかつてなき理りぞ、など強言すめれど、現に然ること有るをいかにせむ、あな狭き窮理学かも、かく云ひても、なほ西洋の窮理によりて、知られざることなし、といはむ人のあらば、篤胤が、問ふべきことの多かるを、それ悉に答へなむか、然る人の豈あらめやも、

と述べている。⁽³⁵⁾①では日本の窮理家が西洋の窮理家の精神に背いてい⁽³⁶⁾るとする。また、②のように日本の窮理家は中国の学問によって「生さかしら」が身につけてしまっているとしている。そして、③では「西洋の窮理によりて、知られざることなし」という窮理家を批判しているのである。晩年の著作『大扶桑国考』にもこれらと同様の窮理批判がみられるのである。また、篤胤は西洋の窮理について、

④「その究理の委きは、悪きことには非ざれども、彼紅夷ら。世には真の神あることを知らず。人の智は限り有るを。限无きの万物の理りを考へ究めんと欲るに付ては。強たる説多く。元より狡意なる

国風なる故に。現在の小理に拘泥^{くわうに}て。却つて幽神の大義を悟らず。其れ故に。その説至て究屈^{くわく}にして。我が古道の妨げとなる事も多いでござる。」(『志都能石屋講本』)

⑤「さる学する徒(蘭学者―筆者註)など。小賢^{こけん}しく。物の理をば。究めたりげに云はずれど。本より大道の本を弁へざるが故に。何でか其末を知^しことの有らむ。斯て又西洋学の徒は。あながちに。物の理を究めむと勉むるが故に。考得^{かうとく}たりげに思はる、ことも。無には非ねど。其はた実には測り難きが上に。彼ら強^{かち}ても思ひ究めざる事は。造物主の所為なり。と遁辞^{とんじ}するより外なし。あはれ万国の戎狄ども。真の理をいかで知らめや。」(『玉たすき』)

とも述べている。④では西洋の窮理が「我が古道の妨げとなる事も多い」とはっきり述べている。④・⑤ともに、人知には限りがあり西洋の窮理で説明できることにも限界があると述べている。蘭学者が西洋の窮理によってすべて説明できると主張していることに反対しているのである。

(2) 西洋天文学の批判

篤胤は先に見たように西洋の天文学の観測の精密さや努力を評価しているのである。しかし。一方で次のような批判も行っている。

①「遙西の国人は、右の如く、此の大地の有象^{あうざう}をよく見究め、また虚空なることをもなほくさく精密に考へ得て、漢人の説とは、はるかに勝れることども多けれども、それもなほ、測算^{はかりざん}の及ぶ限りにこそあれ、その及ばぬ所は、今の現の事だに、なほ知り尽すこと能ざること多ければ、まして、大地日月などの、かくの如く成れる

初は、知るべきやうなし。」(『靈能真柱』)

②「オランダカラ、天文ヤ地理ノ考ヘガ、委シク伝ツテ来テ、是ハ唐土ノ大極ヤ、無極ナドノヤウナ、ノロクサイコトデナク、実事ニヨク合テ居考ヘタガ、夫デサヘ、天地ノ測リ難ク、大キイニ合セテハ、庇アヒカラ、日蝕ヲ拝ンダホドニ、チツトバカリノ所ガ知タノヂヤ。」(『悟道弁』)

この①では、西洋天文学の正確なことは認めつつも、観測のみにたよっていることを批判している。また、大地・日・月などの「かくの如く成れる初」については、西洋の天文学では「知るべきやうなし」と述べている。天地の成り立ちは日本の神話によってしか分からないとするのである。②では西洋の天文学でさえも「チツトバカリノ所」が分かつたにすぎないとしている。また、篤胤は西洋の地動説に対して、

③「印度の古説に、地軸と云ば、日輪は旋らずと云説なること著く、

此は近世、西洋人も測量し、諸越人も早く考へ得て、漢末に其説を記載し、共に我が神典の古伝に符ひて、万古に動なき公説にぞ有ける。」(『印度蔵志』)

④「天ハ動カズ、地ノ動キ旋ルト云コトハ、外国ノ説ヲ借ルニ及バズ、本ヨリ御国ノ古伝ニテ明ナルコト」(『古道大意』)

と述べている。③・④ともに、地動説が日本の古伝説にも記されているとするのである。これらはかなり強引な説ではあるが、西洋の天文学を相対化しようとしていたことがわかる。

(3) 西洋医学の批判

篤胤は、西洋医学について「此等とても。必よいとばかりは申がたく。

やはり撰んで取らねばならぬが。」(『志都能石屋講本』)と述べて、西洋医学であつても取捨選択が必要であるとしている。西洋医学を無批判に信奉することを戒めている。殊に、西洋医学の人体解剖に対しては、人の体を細密に断割(たつち)つて見るなどは、こりや紅夷(あかえみ)の国のえみし等が致すことで、信にえびす臭く、御国の人などの為すべきことではない。

(中略) 解体の図などを見ても、能く分らぬと思ふ人は、獸をひらいて見るが宜い(よ)いござる。とんと腹中のやうすは、人と何も異(か)はない。夫も猿か。ないしは獺(か)が宜(よ)い物でござる。何れにも。もはや世に。かやうの書物も多く出来て。これ程にも知れて来たことゆゑ、解体は為(せ)すともな(な)こと。実に忍(しの)び難(が)いことだ。(『志都能石屋講本』)

と批判している。西洋医学の行う人体解剖に対して「実に忍(しの)び難(が)いこと」としている。実際に解剖する必要はなく、解剖図を見るか動物の解剖をすればよいというのである。

また、篤胤(あつぐ)は先に見たように西洋の薬品の効能を高く評価しているのであるが、しかし一方で、

其の渡り来る薬品どもの中には、効能の勝れたるも有り。又は製煉を尽して至て猛烈なる類も有て。良医これを用ひて病症に応ずれば、灼然(しやくぜん)き効験(きくけん)を奏(あ)すも有れど。本その薬性を知らず。又は其薬性は知ても。庸医(ようい)らは其用ふべき処を知らず。若その病症に応(お)げざれば、大害を生じて。忽ち人命を亡ふに至る。此は譬(たと)へば猿に利刀(きりや)を持たせ。馬鹿に鉄砲(てつぽう)を放た(はな)し令(し)るやうな物で。信(まこと)に危(あや)しいこと甚(こ)しいでござる。(『志都能石屋講本』)

と述べている。つまり、西洋の薬品は使用を間違えば大変危険であると警告している。なお、篤胤(あつぐ)はインドの医学が西洋に伝わつて発達したとしている。(46) 西洋医学を無闇に信奉することを批判しているのである。

(4) 西洋の四元説の批判

篤胤(あつぐ)は先にみたように西洋の四元説を評価しているのである。しかし、一方では「実に然(ま)ることなり、然(ま)は有(あ)れど古(いにし)への正(ただ)しき伝説(でんせつ)の無(な)ければ、その四元の謂(いは)れを知らず、たゞに其(その)の物をとらへて、理(こと)りのみ云(い)ふめるは、なお未(いま)だしきことなりけり」(『靈能真柱』)と述べている。このように西洋人は正しい古伝説を知らないために、四元の根柢(こんてい)を知らないと批判しているのである。

また、篤胤(あつぐ)は『古史伝』(48) や『古道大元顕幽分属図説』(49) で風・火・金・水・土の五元説(五柱)を主張している。こうした点からも西洋の四元説に対して、

西ノ極なる国々にて、風火水土を四元と云て、其理を云ふ説には、然ること、聞ゆるも有れど、金を洩したるは、古伝の詳ならざる国人の、眼に見ゆる理をのみ思ひて、云へる説なればなり。(『古史伝』)

と批判している。西洋の四元説(風火水土)は金を落として述べている。なお、篤胤(あつぐ)は五元説(風火金水土)をとっているが、人体については例外的に四元と靈魂で説明しているのである。(51)

(5) 西洋崇拜の批判

篤胤(あつぐ)は蘭学者の日頃の言動を観察するとともに、これらの者にしばしば見られる態度を問題にしている。例えば、

①「近頃ハヤリ初タル、阿蘭陀ノ学問ヲスル輩ハ、ヨク外国ノ様子モ知テ居ナガラ、其中ニハ、心得違ヒラシテ、又ヤミクモニ、西ノ極ナル国ヲ最眞シテ、」（『古道大意』）

②「西極なる国の、学びをする輩も、また彼の国々の酋長どもを礼まひ云ひて、天子よ大尊よなど云ひもし、書きもするを、聞くごとに見るごとにむねわるく、ほと／＼物もつき出むとするぞかし、此の輩も後には、儒者の西戎を尊む如く、紅毛人を尊むべきその芽の既に見ゆれば、かくいちはやく咄し置になむ、」（『靈能真柱』）

③「近ごろ。蘭学ちふ事も始りて。其むれの人々は。紅毛人をも尊むめり。かゝる事の弊えにや。甚く大御掟に違へる人も。をり／＼有りりと聞ゆるハ。いとも憤ろしく。慨き事の極ミなりけり。」（『千鳥の白波』）

④「然るは此学を奉ずる徒（蘭学者―筆者註）。猥に彼を尊信して。我にも優れる如く。言ひも思ひもする由なるは。甚も畏き狂業なり。」（『蘭学用意』）

と述べている。①では蘭学者の中に「心得違ヒ」をして「ヤミクモ」に西洋の国々を「最眞」する者があると批判している。②では、蘭学者には西洋の「酋長」をうやまい、西洋人を崇拜するさざしがみえていと批判している。③では蘭学者の「紅毛人」（オランダ人）崇拜を問題にしている。④も同様の主張を行っている。このように蘭学者の西洋最眞や西洋人崇拜を繰り返し批判しているのであった。

また、篤胤は蘭学者について「近頃蘭学者と云て。オランダの学びをする輩が。とかくオランダ語で物を云ひたがりますが。是は漢語で物云

よりは。もツと悪い。（中略）都て今はやる蘭学する輩も。われ蘭学者よと知たふりに。病名薬名もかも。オランダ言で申すが。日頃うるさく思て居ること故。序に噂を致すので御座る。（中略）況てオランダの穢き言を云ひ弘むるは。いやなこと御座る。」（『講本気吹殿』）と述べている。蘭学者がオランダ語を無闇に使いたがることを批判している。さらに、篤胤は「謂ゆる西洋学者など。密々に。於蘭陀正月など云ふ狂事するも有り」と聞けど。（『玉たすき』）とも述べている。蘭学者が秘かに行うオランダ正月を「狂事」と非難しているのであった。

以上のように、篤胤は西洋の窮理・天文地理学・医学・四元説の問題点を指摘するとともに、蘭学者の西洋に対する態度を批判しているのである。蘭学者にしばしばみられる西洋科学の過信と西洋崇拜の傾向を批判しているのであった。

おわりに

本稿は、篤胤の蘭学観の歴史的特質について明かにすることが課題であった。ここでまとめておきたいと思うのである。

(1) 篤胤は蘭馨堂に入門して蘭学を学んだ。そして、国学者であっても蘭学などの外来の学問を学ぶ必要があると説いている。しかし、蘭学をはじめ外国の事物には善いものと悪いものが混在しているため、善いものを選んで用いなければならぬとしている。蘭学を取捨選択しながら摂取するように主張しているのである。

(2) 実際に、篤胤は蘭学の各分野を高く評価しているのであった。

すなわち、①西洋人は物を深く考えるために窮理には優れたものがある、②西洋の天文地理学は実測の努力に裏付けられた正確なものである、③西洋の医学・薬品には優れたものがあり「御国の用」となること大である、④西洋の四元説（風火水土）は「然ること」である、などと述べているのである。このように篤胤は蘭学を率直に評価して、これらを国学の中に積極的に摂取しているのであった。そして、仏教や中国の学問を批判する道具としても蘭学を利用しているのである。

(3) しかし、篤胤は一方で蘭学を批判している。すなわち、①人には限界があり西洋の窮理によってすべてが分かるわけではない、②西洋の天文地理学の観測実測には限界があつて天地の成り立ちまでは分からない、③西洋医学についても取捨選択して利用しなくてはならない、殊に人体解剖はするべきではない、西洋の薬品は使用を誤ると非常に危険である、④西洋人は正しい古伝説を知らないために四元説の根拠を知らない、そもそも古伝説では五元説（風火金水土）が正しいのであつて西洋の四元説には金が落ちているのである、⑤蘭学者には西洋崇拜の悪い傾向が見られる、などと蘭学や蘭学者を批判しているのであった。

以上のように、篤胤は蘭学を取捨選択しながら国学に摂取しているのであるが、その一方で蘭学者にしばしばみられる西洋科学の過信と西洋崇拜の傾向を激しく批判したのである。篤胤の蘭学観は、単なる和魂洋才の主張といったものではないのである。

なお、天保一一年末（一八四〇）に幕府は秋田藩を通して、篤胤に国元への退去・著述差止めを命じた。この幕府の処分は、天保改革の思想・文化統制の一つであるといわれている。⁽⁵⁸⁾ 天保一四年（一八四三）閏九月

に篤胤は秋田で死去したが、これ以後の平田派国学者の蘭学観については、今後の課題としたいと思うのである。

註

- (1) 本稿では、篤胤の著作の引用は『新修平田篤胤全集』（全二二巻、名著出版、一九七六―八一年）を用いた。以下これを『新修全集』と略記する。なお、旧字・略字などは、新字に改めて引用した。頁数は各巻ごとの総頁数を基準に記した。
- (2) 沼田次郎『洋学』（吉川弘文館、一九八九年）の一四四―一六〇頁。なお、吉田忠「蘭学と蘭学者」（『江戸後期の比較文化研究』所収、ペリカン社、一九九〇年）も参照。
- (3) 田原嗣郎『平田篤胤』（吉川弘文館、一九六四年）の一三七頁。
- (4) 鮎沢信太郎「洋学による平田篤胤の地理思想」（『地理学史の研究』所収、愛日書院、一九四八年）。
- (5) 青木歳幸「科学的思考の発達と蘭学」（『日本の近世13 儒学・国学・洋学』所収、中央公論社、一九九三年）の三三三頁。
- (6) 服部敏良「平田篤胤の医学」（『皇学館論叢』第五巻第四号、一九七二年）。のちに『江戸時代医学史の研究』（吉川弘文館、一九七八年）に所収。
- (7) 平野満「平田篤胤の蘭馨堂入門と蘭方医学研究」（『日蘭学会会誌』第一〇巻第一号所収、一九八五年）。同「吉田長淑 蘭馨堂門人の拡がり」（愛知大学総合郷土文化研究所編『近世の地方文化』所収、

名著出版、一九九一年)。なお、平野氏は篤胤の蘭馨堂での蘭学研究の時期について文化四年(一八〇七)から同六年(一八〇九)のおよそ二年間であることを明かにされた。本稿はこの見解に従った。

(8) ドナルド・キーン『平田篤胤と洋学』(『日本人の西洋発見』所収、中央公論社、一九六八年)。

(9) 吉川芳秋『蘭医学郷土文化史考』(非売品、一九六〇年)に蘭馨堂の「門人譜」が所収されている。この「門人譜」に平田篤胤の名前が記されている。

(10) 谷省吾『平田篤胤の著述目録 研究と覆刻』(皇学館大学出版部、一九七六年)の七六―七七頁。なお、『大整平先生著撰書目』の中の『蘭学用意』の解説全文は次の通りである。「この蘭学と云ふ事の。皇国に始りたるより。此学の弘まれる事。中にも医術また技巧の物等に於ては。国用を為すも多かれど。是に就て又弊を生ぜし事も少からず。然るは此学を奉ずる徒。猥に彼を尊信して。我にも優れる如く。言ひも思ひもする由なるは。甚も畏き狂業なり。我は君師たり。彼は臣弟たり。彼戎狄ら。いまだ其正理を弁へずとも。我之を知らずは有べからず。抑外蕃の。御国に寄りて仕へ奉らふ事は。総ては天照大御神の御心なれば。次々に万国挙りて。其事物を貢奉るべき事なるが。分て云ふ事は。其荒御魂。大禍津日神の知看す事ゆゑに。彼吉事に凶事いつぎ。世の害となること有るも。広大なる御神徳の中に籠り来れるにて。止べからざる勢なり。されば西洋に限らず。総て外蕃の事物は。其寄せ給ふまに。其好きを撰びて之を用ひ。悪きを捨れば。皇神の御心に叶ひ。之に反する事は。皇

神の御心に違ふ。此を取捨せざるは偏執なり。譬へば兵は謂ゆる凶器なり。然れども彼これを用ふる事は。我之を用ひずは有べからざるが如く。械に臨み変に応じて。其取捨肝要なる事を。儒仏の道を先蹤として。明かに弁論せられし書なり。今より後有ゆる国々悉に棹柁干さず。船満つゞけて。参来るべき事なれば。其万国の君師たる。皇朝の学びに志す者は。この心得なくは有べからず。」

(11) 『入学問答』(『新修全集』第一五卷所収)の一〇一―一〇二頁。
(12) 『入学問答』(『新修全集』第一五卷所収)の一〇四頁。なお、篤胤は『大道或問』(『新修全集』第八卷所収)で「外国の学ハ、取捨候の心得第一の事ニ候」(八六頁)と述べている。この『大道或問』でも「入学問答」と同様の主張を行っている。

(13) 『志都能石屋講本』(『新修全集』第一四卷所収)の四四五―四四六頁。なお、『志都能石屋講本』には「儒学仏学蘭学を初め。外蕃国の学事は。都てみな陋く少さきこと」(四四一頁)ともある。

(14) 『講本気吹麩』(『新修全集』第一五卷所収)の一三九頁。

(15) 『鬼神新論』(『新修全集』第九卷所収)の二四頁。『鬼神新論』は『新鬼神論』(田原嗣郎等校注『日本思想大系五〇 平田篤胤・伴信友・大國隆正』所収、岩波書店、一九七三年)を改定したものであるが、この両書で蘭学についての記述に変化はないのである。

(16) 『講本気吹麩』(『新修全集』第一五卷所収)の一三八頁。

(17) 『志都能石屋講本』(『新修全集』第一四卷所収)の四四四頁。

(18) 『靈能真柱』(『新修全集』第七卷所収)の一八四頁。

(19) 『古道大意』(『新修全集』第八卷所収)の五八頁。

- 20 『古道大意』（『新修全集』第八卷所収）の五八―六〇頁。
- 21 『古道大意』（『新修全集』第八卷所収）の五六頁。
- 22 『古道大意』（『新修全集』第八卷所収）の五七頁。
- 23 『靈能真柱』（『新修全集』第七卷所収）の九四頁。
- 24 『古道大意』（『新修全集』第八卷所収）の五八頁。なお、この『古道大意』では五大陸の説明も行っている。
- 25 『出定笑語』（『新修全集』第一〇卷所収）の三六九頁。
- 26 『仙境異聞』（『新修全集』第九卷所収）の五四五頁。
- 27 『志都能石屋講本』（『新修全集』第一四卷所収）の四四四頁。
- 28 『志都能石屋講本』（『新修全集』第一四卷所収）の四八〇頁。なお、『志都能石屋講本』では西洋の医学説の一つについて「西洋人の説ゆゑ。慥かに信ずるが宜しからうでござる。」（四九八頁）と述べている。
- 29 『講本気吹颯』（『新修全集』第一五卷所収）の一三八―一三九頁。
- 30 『志都能石屋講本』（『新修全集』第一四卷所収）の四九九頁など。
- 31 『靈能真柱』（『新修全集』第七卷所収）の一四頁。なお、『古史伝』（『新修全集』第一卷所収）の二四七頁にもほぼ同文の記述がある。
- 32 『出定笑語』（『新修全集』第一〇卷所収）の三五三頁。なお、『印度藏志』（『新修全集』第一一巻所収）の五二―五三頁、『古史伝』（『新修全集』第一巻所収）の二五〇頁にも同様の記述がある。
- 33 『俗神道大意』（『新修全集』第八卷所収）の二一七―二一八頁、『気吹舎筆叢』（『新修全集』第一五卷所収）の四三二―四三三頁、

『古史伝』（『新修全集』第一巻所収）の二四七頁などで五行説の批判を行っている。

- 34 『鬼神新論』（『新修全集』第九卷所収）の二四頁。
- 35 『靈能真柱』（『新修全集』第七卷所収）の一八四頁。
- 36 『大扶桑国考』（『新修全集』第八卷所収）の五五二頁に「凡て究理と云ふこと、漢土人の早く云ひ誤り、西洋なる国人の蕃人らは、殊にいひやる事なるを、今し皇国人も其説にならひて、何くれと論ずるを、実にも究理し得たりと、聞ゆる説の無にしも非ざる故に、吾もその究理せらるゝ限りは、究理説をも説くなれど、実に人の智はかぎり有り、如此き事どもに当りては、究理の論には及がたき物なり。然るを近ごろ蘭学者と云ふ徒を見るに、其謂ゆる西哲らが、究理の説に縛せられて、其徒もろこしの旧き究理学を笑ひこそ為れ、余より此を見れば、五十歩百歩の勝劣にて、其五十歩内なる垣内に居すくみて、垣外なる神理までに目を飛し、耳を長くし、手足を伸る学者をば、吾いまだ此を見ず。唯に小ざかしげに物言ふ一種の鈍学を添出せりとこそ思はるれ。」とある。
- 37 『志都能石屋講本』（『新修全集』第一四卷所収）の四四四―四四五頁。
- 38 『玉たすき』（『新修全集』第六卷所収）の五四二頁。なお、『赤泉太古伝』（『新修全集』第八卷所収）の四二〇頁。西洋には真の古伝説が残っていないので、「窮理の本」は立たないとしている。
- 39 『靈能真柱』（『新修全集』第七卷所収）の九四頁。
- 40 『悟道弁』（『新修全集』第一〇卷所収）の五七八頁。

- (41) 『印度臧志』（『新修全集』第一卷所収）の六五頁。
- (42) 『古道大意』（『新修全集』第八卷所収）の五六―五七頁。
- (43) 『志都能石屋講本』（『新修全集』第一四卷所収）の四八〇頁。
- (44) 『志都能石屋講本』（『新修全集』第一四卷所収）の四九八頁。なお、『天説弁々』（『新修全集』第七卷所収、二九一頁）では、山脇東洋の『臧志』について触れている。
- (45) 『志都能石屋講本』（『新修全集』第一四卷所収）の四四四頁。
- (46) 『玉たすき』（『新修全集』第六卷所収）の二二二頁。『印度臧志』（『新修全集』第一卷所収）の六四頁。
- (47) 『靈能真柱』（『新修全集』第七卷所収）の一一四頁。
- (48) 『古史伝』（『新修全集』第一卷所収）の二四六―二四七頁に「彼五柱の神等は、その物の分れ別る、間に、其物に因て生出坐し、某々に持分て、掌給ふにて、其を一つに都ては、伊邪那岐、伊邪那美命の御神徳につゞまり、其本を求むれば、女男二柱の皇産霊大神の神霊に止まり、なほ風火金水土の神たちの、その向々枝々を掌給ふ神たち多く、（中略）其御神徳の、千ぢとなり万づと為り、天地の間に充滿て、至らぬ隈なく、世に成出る物の限り、その御霊に洩る、事なき故に、悉く此理を推て、其大概の知られざる事なきは、最も妙なる物ならずや、」とある。
- (49) 『古道大元顕幽分属図説』（『新修全集』第八卷所収）の七六頁に「風ノ神火ノ神金ノ神水ノ神土ノ神の産霊によりて、種々の物を造り化し」とある。
- (50) 『古史伝』（『新修全集』第一卷所収）の二五〇頁。

(51) 篤胤は人体の構成について主に四元（風火水土）と霊魂によって説明していた。例えば①『靈能真柱』（『新修全集』第七卷所収）の一六五―一六六頁、②『講本気吹魘』（『新修全集』第一五卷所収）の一四一頁、③『志都能石屋講本』（『新修全集』第一四卷所収）の四八二頁、④『古史伝』（『新修全集』第一卷所収）の二五〇頁などでみられる。

なお、『古史伝』（『新修全集』第一卷所収）に「人活て居る間の呼吸は、風に非ずや。伊邪那岐ノ命の御氣に、風ノ神の生坐るを思ふべし。また人ノ体のかく煖なるは、火に非ずや。また体の滋潤は水に非ずして何ぞ。骸を埋みて何物にかはなる、土に化るにあらずや。たゞ金に受たるは、何物と云こと知られ難きが如くなれど、決めて骨なるべくぞ思はる、。然るは骨は人体の柱とある事の、彼ノ御戈を国土の中心と為給へる事に符ひて思はるればなり。」（二五〇頁）とある。篤胤は人体の説明で「金」の扱いに苦慮していたことがわかる。

- (52) 『古道大意』（『新修全集』第八卷所収）の六八頁。
- (53) 『靈能真柱』（『新修全集』第七卷所収）の一四九頁。
- (54) 『千島の白波』（『新修全集』補遺五所収）の二頁。
- (55) 前掲註10『蘭学用意』を参照。
- (56) 『講本気吹魘』（『新修全集』第一五卷所収）の一五三―一五四頁。
- (57) 『玉たすき』（『新修全集』第六卷所収）の四四九頁。
- (58) 藤田覚『天保の改革』（吉川弘文館、一九八九年）の一三―一五頁。

〔付記〕 本稿は、第四一回神道史学会大会（平成六年六月、皇学館大学を会場）において行った口頭発表「平田篤胤の蘭学批判」を全面的に改訂したものである。

（なかがわ・かずあき 東京工業高等専門学校非常勤講師）